第Ⅳ章　自閉的傾向を持つ発達遅滞幼児の指導上の一考察

（問題行動を伴った発達遅滞児の治療教育の研究）

研究第8部　川島杜紀子

1. 問　　題

前年度より継続して、自閉的傾向を持つ発達遅滞幼児に対して、集団の中で、特定の大人と、一対一の個人的な人間関係を持つという個別指導の方法をとってきた。そのねらいと必要性について考察を加えたいと思う。

2. 方　　法

八人から十人のグループに、一人の自閉的傾向を持つ発達遅滞幼児を加え、その子どもに対しては、特定の治療者が一名つく。保育時間は午前十時から午後一時半までである。指導者はその時間絶えずではないが、かなり密接にその子どもと親しい人間関係をつくる。全部で七人の自閉的傾向を持つ発達遅滞幼児について同様の試みを行っている。

3. 指導経過の一報告

K・Hの場合（昭和37年12月25日生）

〔家族〕父・母・妹・祖父　（祖母、3才の時死亡）

〔発育状態〕（母の報告）

1才まで普通の発育をしている。

1才10か月頃、二語文程度、単語の数も多い。

2才半頃、言語遅滞に気がつく。

3才頃、夜、なかなか寝ないで困る。

祖母死亡（母方の祖母で、母親は頻繁に、病院へ通っていた。）

物を投げる（気にいらないと茶碗でも投げる）

3才5か月、引越をする。これ以後急に悪くなったと思う。空笑。ひとりごとがでてきた。

4才頃、母が妊娠したので祖父と寝る。

4才5か月、妹が出生。言葉の崩壊。

物を投げるのがはげしい。

食べない。いつも、いらいらしている。

〔来所〕

○昭和42年12月（5才の時）

＜主訴＞

ひとの目を見ない。

会話ができない。

原因がわからなく癇癪を起す。

空笑。ひとりごと。

＜面接の印象＞

ひとを意識するが非常に混乱している。

物に対しても安定した関係が持ってない。

自分の行動にも不安感が強く、いつもいらいらしている。

ひとの言葉をくりかえしていう。

＜発達テスト施行＞（昭和42年12月）

乳幼児精神発達テスト不能

〔グループでの指導経過〕

○昭和43年1月（入園）

○昭和43年3月まで

特に一人大人がつくことなくグループに入っている。いやがらずに通園して来る。

原因が理解できなく泣く。レコードをかけると喜ぶ。何をするともなく室内をうろうろ歩き回る。お弁当は口に入れたり、出したりしてとてもきたならしい食べ方をする。

春休み以後、状態が悪くなる。

○昭和43年4月

○つきそいの母や祖父から離れず、待合室でゴロゴロ寝ころんでいる。

○時間外にお弁当を食べたがる。

○原因がなく泣く。

○大きな声で何か言いながら室内を歩き回る。Tのさそいには全然のらない。

○5　月：—特定の指導者(T)がつく。

○Tに抱かれると気持よさそうにニヤニヤしたり、ゲラゲラ笑う。

○Tが歌を歌ってあげるとじっと聞いている様子。

○Tには原因がわからないが、いらいらして側にある机をたおしたり、寝ころんで泣く。

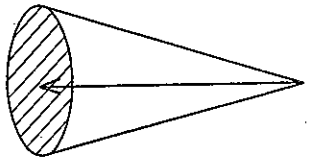
○ひとが側にたくさんいると、いらいらすることが多い。
○Tと二人だけの時は落ちついている。
○6　月
○来園することが楽しみになる。
○ニコニコして入室する。
○お弁当は相変らず、ぐちゃぐちゃ両手の指で、いじりながら口に入れたり出したりする。ほとんどこぼして食べない。
○Kの一番好きな食物（ヨーグルト）を保育中Tと買いに行く。
○買いに行く時、入口を出たり入ったりして行きたいのか、行きたくないのか気持がはっきりしない
○Tに対して甘えてくる。
○7　月
○何かしたくても、できない（自分で決心がつかないように見える）ときが多く、とてもいらいらする。Tが「……したいのね……しましよう」というと安心する。
○8　月
○言語での意志表示が多くなる。
○いらいらすることも少ない。
○暑い時はとても気分が悪いらしく、シャンプーを頭につけ、その上に砂をかけて庭をかけまわる。自分でもどうしていいのかわからない感じがする。
○9　月
○Tのさそいにだんだんのってくる。
○そばに他の子どもがいてもいやがらない。
○ぶらぶら歩くことが少なくなり、人形などで遊ぶ。（人形にのりをベタベタつけたり砂をかけたりしてきたならしい遊び方をする）
○10　月
○公園に散歩に行くのを好む。Tが「待って」というと先に行かないで待てる。
○11　月
○一つの遊びに取りつくとかなり長い間遊べる。
○12　月
○ヨーグルトを買いに行かなくなる。
○遊んでいる時の表情がとても穏やかになる。
○1　月
○一日のうち何か一つの玩具に固執する。（電車、人形、砂等）
○2　月
○文字に興味を示す。
○汽車の上に積木を乗せて走らせたりする。
○「……してからこれをしよう」というと理解する。
○はっきりと自分の気持を出せるようになり、いらいらが少なくなる。
○Tや玩具を独占する。
○Tが他の子どもを相手にしていると機嫌が悪い。
○3　月
○一日中砂遊びをしていることが多い。
○Tが他の子どもと手をたたいて歌っているとまねをする。
○Tとふざけて喜ぶ。
○昭和44年4月
○就学を一年猶予する
○食事の仕方がきれいになる。
○Tが、べったりついている時間が短くてもいらいらしない。
○他の子どもに関心を示す（追いかけたり押したりする）

4. 考　　察

上記の事例は、七人の事例のうちの一人である。自閉的傾向がある、ということは一つの現実である。その程度はそれぞれによって違うが、我々治療者の前にいる子どもは「この子ども」「この子ども」と指差された一つの存在であり、あくまでも一つの人格である。その存在そのもの、人間の本質は“変わらないもの”である。“変わらないもの”という意味は規格にはまった一律のものであるということではなく、その存在の究極において共通する点を固持しているということである。その人間の本質とその子どもの現実が異なるところに我々は進歩と可能性があると思うのである。治療者がその子どもと一対一の治療関係をつくるにあたって、自閉的傾向という現実をどのように理解したらよいかということは、人間が真に人間らしく現存する仕方の理解にある。ひとりの人間が他者に対して現存するということは互いに影響しつつ与えあっていることである。従って、現存すること自体コミュニケーションといえる。それは、現存することがコミュニケーションに先行するのではなく、現存そのものがコミュニケーションによって、はじめて実在できるということである。故にコミュニケーションが深まれば、それに応じて現存も密度を増すわけである。このような関係、存在の仕方が普通の人間の現存の姿である。一つの限られた集団の中での個々の現存というと、その中での個々の影響力をさし、個々がグループとともにいるしるしである。我々の、ともにいる、という理解は何か

ら得られるかといえば、いうまでもなく物理的に近いという経験を通してではあるが、究極的には、人間の本質において共通しているという根本的経験に基づいているものである。自閉的傾向という現実は、人格的に他と交流することができない。その存在の仕方は、非常に空間的であるともいえるし人格的に他者に対して不在であるともいえる。ひとりの治療者がつくる密接な人間関係、例えば側にいる、抱く、おぶる、背中をさする、追いかけっこをしてふざける等は人格的交わりのしるし、表現となるものであるが、治療にあたっては我々の求めている現存を与える手段であり、シンボルなのである。しかし、ひとりの子どもを人格的に交流させるようにすることができるのは、単にそれだけではなく、上記の究極的経験に基づいた人格的コミュニケーションが必要なのである。言葉による、はたらきかけや受け入れだけでなく直感による理解と治療者自身が自己の存在の最も深いところを築きあげてきた人間そのものへの態度とそれに対するコミュニケーションが必要なのである。その時にはじめて、抱く、おぶる等の身体的行為とか、物理的条件は新しい次元に移されて人格的表示となり得るのである。

また一対一の関係が集団の中でつくられるということは、特定の治療者との関係が他との関係にまで発展していく過程において、集団の持つ近接性、共存性故に意味がある。仮りにひとの現存の発達を図のような形にあらわすことができるとすれば、その発達は常に←を中心に



して、←印の方向に形づくられる。真の現存が成熟した時、完成した時の姿を斜線のような形であらわすとすれば、その時に中心となるもの、←印であらわされたものは消えてしまうのではなく、常にそのひとの現存の仕方の基礎として、無意識のうちにもその根底にあり、それを土台として、そのひとの現存が成り立っているのであると考えられる。←印に当たるものはひとによって違うであろうが、大抵は母親との結びつきであることが多い。自閉的傾向を持った子どもにとって特に密接な人間関係をつくってくれる治療者の役割は、この←印の役割に相当するわけであるが、その←印の役割を助け、より広がりを持ったものにする要因となるものが、集団そのものと、集団の影響力ではないかと考えられる。なお一対一の特別な治療関係は真の現存が与えられた時、社会性ともいわれるものが成熟した時に、どのように位置づけられるのかといえば、その治療関係の影響力は残りながら、その必要性は発展的に解消していくと考えられるのである。

Chapter Ⅳ

A Study on Group Guidance of Young Autistic Retarded Children

Dept. 8　Tokiko Kawashima

Purpose : To study the necessity of group guidance of young autistic retarded children and how such guidance is situated in the therapeutic education project for mentally retarded children.

Method of Guidance : Mingle one young autistic retarded child with a group of 8 or 9 mentally retarded children receiving therapeutic education, and one therapeutic teacher tries to keep close contact with this particular child in this group.

Study : Considering the relation of an individual to a group, the existence of an individual in a group, we contemplate our practice as to how a young autistic retarded child is in existence in the group, in what way our present guidance is significant for the real existence of such a child, how it is desirable to develop our guidance, and in which stage our guidance is necessary for the child and should be given to the child.